

『八丈島年代記』からみた疫病・疱瘡の歴史

對馬 秀子

順天堂大学医学部医史学研究室

『八丈島年代記』は、伊豆諸島八丈島で最古の記録といわれている。この原本は不明であるが写本は数冊現存し、併せると1400年代から1800年頃までの自然災害、飢饉、餓死、麻疹や疱瘡などの記録を拾うことができる。こうした記録から、八丈島の疱瘡は漂着船の水主や漂着物から島中に流行し多大な被害を及ぼしていたことがわかる。橋本伯寿の『翻訳断毒論』、原南陽の『叢桂偶記』2には、元来日本には疱瘡がなく、人から人へ伝染する病である証拠として、八丈島の疱瘡流行とその際とった対応を紹介している。幕末までの太平洋沿岸には、1,000石前後の御蔵船・通船が往来していた。伊豆諸島の中でも、八丈島は航海の難所といわれた黒潮が本土との間を隔て、潮の流れから西南日本方面からの漂着船が多く、その数180艘とある。疱瘡は漂着船がもたらしたものであるが、自然災害・飢饉と麻疹や疱瘡の流行は重なることが多く、飢饉のところへ疱瘡が持ち込まれ被害が拡大していた。

本報告は、現段階で最も古いと思われる、近藤富蔵著『八丈実記』巻5に綴じられている「八丈島年代記」(1335～1693年までの記録)と「八丈島日記」(1660～1718年までの記録)、国会図書館所蔵『八丈島年代記』(1456～1790年までの記録)の写本を中心に、災害記録と併せながら1879年に種痘医が来島するまでの疫病・疱瘡の史実を明らかにしたい。

【災害・疫病・疱瘡について】

以下は、康正2年から始まる疱瘡流行の記録の一部である。

【康正2年(1456)9月】大風吹て世の中悪し、亦、瘡病夥しくはやる、飢饉にて牛山へ出る。

【寛正4年(1463)正月】大岡の郷より疱瘡の煩い初て、本嶋、小島に於いて、人数672人死ぬる。

【正徳元年(1711)11月】大阪伝法船三根村へ漂着、疱瘡を煩った水主が引き揚げられて相果て、夫れより三根中に流行し、2年の間に全嶋に広がり死者は980～990人。この時は、村境に垣を立て通行を禁じ、村人は家を捨て山へ逃げ、山に住居した。

【寛政7年(1795)10月】八丈島船が伊豆から帰帆、乗り合わせた三根村の村民が船中で疱瘡を煩い三根村から流行した。この時のことは、原南陽(1735-1820)の『叢桂偶記』2に詳しい。

記録からは、大風や早魃で毎年のように飢饉に見舞われ、そこに八丈富士の噴火、地震や津波に疫病の大流行も加わり、過去500年間でその犠牲者は10,000人にのぼることが知られる。

【幕府の対応と島の医師】

遠島の島であった八丈島は、慶長11年(1606)から明治4年(1871)までの265年間に約1,900人の流人が送り込まれた。流人の中には、医師7人と町医や素人医が数人いた。それぞれ在島歴20～50年の長きに渡る。幕府は、困窮した島に御救米を出す一方で、年貢を紬で取り立て、同時に流人を送り込んだ。幕府からは、薩摩芋種、蒟蒻に、疱瘡の妙薬として牛糞黒焼が送られたとの記録もある。明治12年(1879)、東京府庁より種痘術の免許を受けた医師二人が開業のために来島した。

【まとめ】

記録には、飢饉が数年続いた際に卜部や巫女が神祭を行ったともあるが、島人は困窮時には山へ逃れ危機に対応していたことがわかる。史実からは、疱瘡流行に際して死にいくに任せていた段階から、時代とともに病者を里から避け、あるいは被害が拡大すると隣村との往来を遮断するなど疫病への処置がとられるようになっていった事がわかる。また、生き残った子どもは親類縁者や役人などと養子縁組するなどの処置もとられていた。打ち続く困窮に多大な犠牲者を出しながらも、幕府の支援、地役人の援助などで幕末には人口が9,500人と膨張し、人口政策が課題ともなっていたのである。